

家族の行方を知るために

離散家族の再会・連絡回復支援

避難すれば、
砲弾から逃れることはできますが
息子の行方が分からないという
苦しみからは
決して逃れることはできません。

ミルヴァット(65)、レバノン



武力衝突、自然災害、移動によって、毎年数え切れないほどの家族が離ればなれになっています。最愛の家族と連絡が取れなかったり、大切な人の消息が分からないことほど、辛いことはありません。いつでも家族と繋がっているということは、人がどんな困難な状況でも力強く生き抜くために必要不可欠といっても過言ではありません。

離散の原因はさまざまです。紛争、自然災害から逃れる途中で、子どもが親からはぐれてしまうことがあります。高齢者や病人は、住み慣れた地から避難したくない、もしくは避難できない場合もあり、けが人は家族に知らせることができないまま、病院に搬送されることがあります。あるいは、親族に状況を伝える機会を与えられないまま身柄を拘束されることもあります。

離ればなれになった家族の行方を捜したい、連絡を取りたい、再会したいと願うことは当たり前のことです。国際人道法と国際人権法の中でも、行方不明の家族の消息を知る権利は明記されています。

赤十字国際委員会 (ICRC) は各国赤十字社・赤新月社と協力しながら、緊急事態などによって離散した家族を支援するために、世界中で活動しています。またこのような状況に置かれている人たちに対して、尊厳を

維持し、配慮と思いやりを持って接するように職員とボランティアは力を尽くしています。赤十字の仕事は、戦争やその他の緊急事態が終息した後も、何年も続くことがあります。

離散家族支援 (Restoring family links: RFL) にはさまざまな活動が含まれます。その一つは電話やインターネット、手紙などといった連絡手段を提供することです。行方不明者、死亡者などの情報収集をはじめ、消息を絶った人の追跡、家族とはぐれてしまった子ども、被拘束者といった特に弱い立場に置かれている人の登録も実施しています。そして全てがうまくいった後に、ようやく家族の再会が実現されます。

武力紛争や自然災害、移動によって親族と離ればなれになった人が再び連絡を取り合い、また連絡が途絶えないようにすることは、国際赤十字・赤新月運動 (赤十字運動) の基本的な活動の一つです。ここでは、赤十字運動が家族の結びつきを取り戻すために、どのように活動し、なぜ多くの人にとって重要なのかを説明します。



Donevsky Valery/ICRC

離散家族の支援には、
次の活動が含まれます。

- ・ 家族間の情報交換の手配
- ・ 個人の追跡調査
- ・ 個人の居場所の登録と追跡調査によって、失踪を防ぎ、家族と情報を共有
- ・ 家族の再会、場合によって本国送還
- ・ 関係当局に対する行方不明者の情報収集支援
- ・ 死亡者に関する情報の収集、管理、伝達

「すべての者に対しては
それらの者の家族が所在する
場所のいかんを問わず
厳密に私的性質を有する消息を
その家族との間で相互に伝えることが
できるようにしなければならない」

1949年ジュネーブ第四条約第25条

世界中に広がる ファミリーリンク・ネットワーク

武力衝突、自然災害など人道的支援を必要とする状況下で、大切な人と離ればなれになったり、連絡が取れなくなったりした場合、赤十字運動は迅速かつ効果的に対応します。

離散家族の権利を保護する責任は国家にあります。武力紛争時は、国家以外の組織された武装勢力もこの責任を負っています。

ICRCと各国赤十字社・赤新月社は、政府（または組織立った武装勢力）がこの責任を果たせない場合に、それぞれの役割と責任に基づき、政府のサポートから情報提供までさまざまな活動を行います。

赤十字運動には、世界に広がるファミリーリンク・ネットワークがあります。ICRC本部の中央追跡調査局、各ICRC代表部の追跡調査事務局、各国赤十字社・赤新月社の安否調査サービスによって構成されているこのネットワークは、離散家族の支援に関して多くの経験と専門知識を持っています。

赤十字運動は、政府当局との合意に基づき、ファミリーリンク・ネットワークを通じて国境を越えて透明性のある活動に取り組むことが出来るのです。長年にわたるICRCと各国赤十字社・赤新月社との協力関係により、同ネットワークは、大切な人と離ればなれになった人を支援するための独自の情報網を築き上げていくことができたのです。

赤十字運動の離散家族再会・連絡回復支援

赤十字国際委員会 (ICRC) の役割

ICRCは、武力紛争や暴力を伴う状況下での離散家族の支援活動を調整・実施しています。ICRCは、離ればなれになったり、行方不明となった身内がいる家族に対し国際法上の義務を果たすよう政府当局に促します。また、離散を防ぐ最良の方策について助言します。

ICRCはジュネーブ諸条約の規定に則って中央追跡調査局を運営しています。紛争など、国際的な対応を必要とする状況では、ICRC職員が直接、離散家族や行方不明者の親族を支援します。また、離散家族に可能な限り寄り添い、支援できるようにファミリーリンク・ネットワークの活動を調査します。

中央追跡調査局は、赤十字パートナーの能力強化、一貫性の向上、有効な方策やガイドラインの提供を通してファミリー

リンク・ネットワークを指導、支援しています。

各国赤十字社・赤新月社の役割

各国赤十字社・赤新月社は、当該国内で離散家族の支援活動を実施しています。自然災害発生時の対応策を決定し、国際的支援が必要な場合は中央追跡調査局に要請を出します。各国赤十字社・赤新月社の支援活動は必要とされる限り継続され、紛争や自然災害、その他の緊急事態が終息した後も、長期間続くことは珍しくありません。

国際赤十字・赤新月社連盟 (赤十字連盟) の役割

赤十字連盟は各国赤十字社・赤新月社の国際的な活動を調整する組織で、自然災害の被災者に対する救援活動を実施しています。離散家族支援の必要性が考慮され、その重要性和要件が防災計画に組み込まれるよう努めます。

その他の人道支援組織も離散家族の支援にかかわっています。国連難民高等弁務官事務所と国際移住機関は赤十字運動のパートナーとして協働しています。国連児童基金やセーブ・ザ・チルドレンなどその他の国際機関やNGOも、保護者や養育者のいない子どもの保護など、それぞれの得意分野において赤十字運動に協力しています。

過去を解明する記録文書

スイス・ジュネーブにあるICRCアーカイブでは、1870～71年の普仏戦争（プロイセン・フランス戦争）までさかのぼって戦争捕虜に関する情報を保管しています。過去の紛争における個人の消息について照会を受けると、規則に沿って詳細な情報を公開します。



家族を引き裂く 武力紛争

武力紛争やその他の暴力を伴う状況において、家族が離ればなれになる理由はさまざまです。紛争地帯からの避難では家族が容易に離されることも多く、また誘拐や殺害される場合もあります。残念ながら犠牲者の身元確認が適切に実施されるケースは多くありません。また、家族に自分の所在を知らせることができないまま身柄を拘束されることもあります。

ICRCは紛争当事者の同意のもと、離散家族に戦線や国境を超えた支援を提供しています。これはICRCが中立かつ独立した機関だから出来ることなのです。

武力紛争や暴力が生じた多くの国々で、ICRCは自由を奪われた人々を訪問し、家族と定期的に連絡が取れるように尽力しています。必要に応じて収容所当局との調整のもと、家族による訪問や電話連絡を支援し、被拘束者が家族に手紙を送れるようサポートします。近親者と連絡が取り合える状態であることは、被拘束者やその周りの者に精神的な安定をもたらします。また、家族の訪問により、被拘束者が基本的な支援を受け、十分な食料を得ることが出来るようになる国もあるのです。

行方不明者の 家族の支援 — 最も大事なこと

行方不明者の家族は、大切な人に何が起きたのかわからないという耐えがたい苦しみを味わいます。特に、武力紛争やその他の暴力を伴う状況の中で家族の行方がわからなくなった場合、その苦しみは計り知れません。

人は行方不明の親族と連絡が取れないときや安否が確認できないとき、精神的に非常に不安定な状態に陥ります。家族がもはや生きていないのではないかと思っても、確証が得られないため死者を弔うこともできず、家族に何が起きたのかわかるまで自分の生活を取り戻すことができません。

兵士であれ市民であれ、行方不明になるのは女性より男性の場合が多いのです。そして、男性は多くの場合、一家の稼ぎ手であるため、残された家族が経済的に困窮することも多々あります。

家族のニーズはその時の状況や教育、経済状態によってそれぞれ異なります。しかし、ほとんどの場合、最優先事項は行方不明者の安否を知ることと、大黒柱に代わる経済的援助を受けるといことです。法による裁きが最も重要だとする家族もいます。

人は、国際人道法と国際人権法の下、消息のわからない親族の状況を知る権利を持っています。これらの法律は、政府当局に対して、行方不明者の安否や所在を確認し、家族へ情報を提供するためにできる限りのことをするよう義務付けています。

ICRCは、被害家族をより良い方法で支援し、これ以上の行方不明者を出さないためにも、当局が説明責任を果たすよう政府や軍の意識向上に取り組んでいます。ICRCはこうした活動を通して、家族に迅速に情報を伝えるよう政府に促します。また、行方不明者に何が起きたのかを明らかにし、残された家族を支援するために必要な、連携・情報共有のメカニズムを構築する上で、政府当局をサポートすることもあります。





Kokic Marko/ICRC



Kozachenko Aleksandr/American Red Cross

ICRCは、収容施設、病院、遺体安置所などを訪れたり、当局に調査を要求するなど、行方不明者を探す活動にも携わります。行方不明者の捜索は複雑なプロセスであり、ICRCに加えて数カ国の赤十字社・赤新月社が関与することもあります。多くの場合、行方不明者の捜索には長期的な取り組みが必要です。

国際人道法には、強制失踪を禁ずる規定がいくつか制定されています。

- ・ 家族には行方不明の親族の状況を知る権利があります。
- ・ 紛争当事者は行方不明者を探し、家族からの問い合わせに答えなければなりません。
- ・ 埋葬された場所の正確な場所と標識、そこに埋葬された人の詳細を示したリストは開示されなければなりません。
- ・ 国際的武力紛争の当事者は、傷病者、難破船の乗船者、戦争捕虜、その他自由を奪われ保護下にある人々、死亡者について、公平かつできるだけ迅速に、情報を提供しなければなりません。
- ・ 敵に拘束された戦闘員と文民は、生命、尊厳、人権、信条が尊重されなければなりません。彼らはすべての暴力や報復から保護されなければなりません。また、家族と連絡を取り合い、支援を受ける権利があります。

マラニア・パベンコは、妹のユージニア・カウカクが1943年にウクライナの農村の自宅からナチスに連れ去られて以来、一度も妹に会えずにいました。2008年9月、マラニアは、妹の所在が判明するかもしれないという期待を胸に抱きつつ、ウクライナ赤十字社に問い合わせました。その当時マラニアは、何から着手すればよいか分からず、ユージニアが戦争を生きのびたかどうかさえ知らなかったのです。

ウクライナ赤十字社は戦後の記録を調べ、ユージニアが1950年代初期に米国に渡った可能性があるという情報を入手。マラニアの問い合わせをアメリカ赤十字社に転送しました。そして、赤十字による調査によって、姉妹は66年という長い離別の年月を経てついに再会を果たすことができました。このときマラニアは90歳になっていました。ユージニアの息子は、「母はずっと懸命に働いてきました。年老いてようやく家族に会えて、ほっとできるときがきたなんて、本当に素晴らしいことです」と語りました。

一方で、家族が見つからず、非常に苦しむ人々もいます。クルス・デル・カルメンの2人の息子は、1996～97年のコロンビア内戦で行方不明になりました。「上の息子は連れ去られたとき22歳、下の息子は18歳の誕生日からわずか3か月でした。とてもつらいです。けっして乗り越えることなどできません」。彼女は子どもたちを探すため、持っていたものをすべて売り払いました。さまざまなところに問い合わせましたが、具体的な答えは得られませんでした。彼らは死んだのだと言う人もいました。武装集団が2人を兵士にしようとしたところ、2人が拒んだため、殺したというのです。「でも、私はどうしても信じられません。はっきりとした証拠がないんですから。自分の目で見ただけではありません。息子たちが生きてるか死んでいるかわからないのです。どこにいるかもわからないのです。どこそこで息子を見たと言ってくれる人もいません。全く情報がないのです。心の中にけっして埋めることのできない穴がぽっかりとあいたままで、どうしようもなく苦しいです」

自然災害による 家族の離散



地震、津波、サイクロン、洪水、干ばつ—こうした災害が起こると、人々は一刻も早く家やコミュニティから避難しなければなりません。安全を求めて皆が離散します。ときにはコミュニティごと避難することもあります。けがをした人が病院に運ばれ、どこにいるかを家族に伝えることができないこともあります。死亡者も、必ずしも身元が確認されるわけではありません。

通信手段が寸断されると、被災地域の内外にいる親族と連絡を取ることができなくなります。多くの人が家族の消息を知りたい、連絡を取り合いたいと切望します。災害時に家を留守にしていた場合はなおさらです。

さらに自然災害は、地域のシステムを機能不全に陥れるため、死者への対応が困難になります。遺体を適切に管理し身元を確認することは、家族が肉親の安否を知る上で必要不可欠です。遺体の管理や身元確認が不十分であると、生き残った人の心やコミュニティにはいつまでも深い傷が残ります。遺体の身元確認は、遺産や保険申請の重要な法的根拠となるため、親族に長期的な影響をもたらします。

自然災害により、愛する人との連絡が途絶えてしまった家族への支援は、各国赤十字社・赤新月社の重要な活動の一つです。この活動は多くの場合、政府の活動を補うものであり、国や地方自治体の緊急対応や復旧・復興事業と連携して行われます。

災害が襲ったときに家族の消息を知りたいというニーズにいち早く対応するためには、綿密な計画が不可欠です。各国赤十字社・赤新月社では、人々のニーズを分析し、それに素早く対応できるよう特別な訓練を受けた職員が対応します。

2010年1月にハイチが地震による壊滅的な打撃を受けた際、何千もの人々が家族の安否情報を入手できず、不安の中で過ごしました。

当時、そのような状況にいた人がどれほどいたの正確な数を把握することは出来ませんでした。海外に住む行方不明者の親族から届いた膨大な数の安否確認要請から、被害の規模がいかに甚大であったかが推測されます。がれきの下に埋もれてしまったのか、生きているけれども連絡できないだけなのか、家族の安否がわからない人が大変な数にのぼりました。

そこで、離散家族支援の専門家を含む緊急対応チームが即座に活動を開始しました。

地震発生から24時間以内に、ICRCファミリー・リンクのウェブサイトにはハイチに関する情報を発信するセクションを設けました。被災地以外の人々が検索したい親族の名前をこのサイトに書き込むと、多くの人の生存が確認され始めました。自分で無事を伝えることができた人もいれば、病院や避難所などで得られた情報に基づいて赤十字のスタッフが連絡した場合もありました。二週間でウェブサイトに登録された人の数は26,000人を超えました。

スタッフは地震の直後から現地入りし、行方不明者の検索にあたりました。被災地の人々が親族と話せるよう、衛星電話も設置しました。クローデル（当時13歳）は、落ちてきたコンクリートの塊で足を骨折したため、地震直後にハイチ国外へ飛行機で運ばれました。彼はそのときのことを、「本当に怖かった」と話します。「自分がどこに連れて行かれるのか、いつお母さんに会えるのかわからなかったから。でも、その後お母さんと電話で話げできました」。クローデルは歩行できるまで回復すると、ハイチに送還され、母親と再会を果たしました。彼女は家や持ち物もほとんどすべて失ってしまいましたが、息子は無事に帰ってきたのです。息子をしっかりと抱きしめながらこう話します。「私たちはその日その日をやっと暮らしています。それでも私は幸せです。家族が生き残ったんですから。赤十字が息子を私に帰してくれました」。

移民に関する課題



KokicMarko/CRC



Garcia-Burgos Marina/CRC

死者の情報管理

紛争や自然災害は多くの人の命を奪います。死亡した人は親族が知らぬ間に遺体安置所に移されたり、埋葬されたりすることさえあるのです。

死者に関する情報を収集し、遺体を適切にかつ尊厳をもって扱うことで、証拠がないまま行方不明になることを防ぎ、遺族が悲しみを乗り越える一助となります。

どのような危機的状況においても、遺体の取り扱いに関する赤十字運動の役割は、政府当局との合意の上で決められます。

役割には次のようなことが含まれます：

- ・ 政府当局への助言
- ・ 死者に関する情報の収集
- ・ 遺体の管理、保管、埋葬
- ・ 犠牲者の家族の支援

ここ数十年で、社会、経済、環境的要因により祖国を離れる人の数が増加しています。今日、多くの人が世界のいたる所で移民として生活しています。

交通手段や通信サービスが広範囲にわたって遮断される災害や紛争下で、団体での避難を余儀なくされる人々と異なり、移民は通常連絡手段を持つことが可能です。それにもかかわらず、時として、緊急に人道支援や保護が必要な状況に陥ってしまうことがあります。

移民政策が厳しくなるなか、結果として申請手続きがはん雑になり、収容施設も増えてきています。加えて、人身売買や取引は、国際犯罪として最も急速に広がっています。家政婦や工場労働者の仕事を探す女性と、性目的の人身売買の被害者が移民の多くを占めています。彼らは、家族との連絡が遮断され、外界との接触ができなくなるというリスクに直面しています。

移民やその家族のなかには、弱い立場に置かれているため家族と連絡を取る上で支援が必要となる人々がいるということを、赤十字運動は認識しています。

特に支援を 必要とする弱者

非常事態において、家族や政府当局などの支援に頼っている人たちは特に弱い立場に置かれます。家族や介護者と離れると特に危険にさらされます。保護者・養育者のいない子ども、高齢者、傷病者、囚人はとりわけ支援を必要とします。

子どもの保護

保護者と離れてしまった子どもたちは、多くの場合、一連の出来事に精神的ショックを受けます。一般にこうした子どもたちは、身体的または心理的な痛手を受けたり、孤児になったり、非公式の養子縁組や人身売買の犠牲になる危険性が高まります。

ICRCと各国の赤十字社・赤新月社は、保護者・養育者のいない子どもを見つけた際には必ず登録し、その後の追跡を行います。それぞれの子どもの特徴や身元を記録し、家族の所在を突き止めるのに役立ちそうな情報を集めます。自ら情報を提供できないような幼い子どもの場合は、写真だけが身元を特定し、親や親族のもとに帰す手がかりとなります。

収集された情報はファミリーリンク・ネットワークを通して公開するほか、適切と判断された場合には地元メディアでの放送や、公共の場での貼り出しも行います。赤十字社の支部や市場など多くの人が集まる場所に写真を掲示することもあります。

赤十字社・赤新月社のスタッフは希望を胸に抱きつつ、有益な情報を求めて公的機関などと連絡を取るために、子どもたちの故郷の町や村を訪ねることもあります。

2008年にコンゴ東部で勃発した戦闘により、何百もの子どもが家族と離ればなれになりました。シャクルも犠牲となった子どもの一人です。他の多くの子どもたちと同様、彼は死亡したとされていました。「武装勢力が荷物の運搬をさせるために子どもを連れていったと聞きました」とシャクルの叔母は言います。「帰ってきた子もいましたが、他の子たちは死んだと聞かされました。うちの子どもたちがいつ帰ってくるのか全くわかりませんでした」。行方がわからなくなってから6カ月後、ICRCはベニでシャクルを見つけました。それから叔父と叔母の所在を突き止め、シャクルを家に受け入れる意思があるか尋ねたところ、喜んで迎えたいと語りました。ICRCはシャクルを叔母の村まで送り届けました。彼女はシャクルを抱きしめ、「私たちはもうあきらめていたんです。この子は死んだとっていました。本当に嬉しい」と叫びました。



De La Guardia Virginia/ICRC



Von Toggenburg Christoph/ICRC

消息を求める被拘束者とその家族

毎年、ICRCは世界70カ国以上で約50万人の被拘束者のもとを訪れます。

ICRCは収容所の環境を確認し、被拘束者が尊厳を持って扱われ、基本的権利が尊重されるよう改善を図ります。また、収容所を定期訪問することで、被拘束者の福利と所在の追跡が可能となり、彼らの状態や待遇について必要であれば当局に勧告することができます。

家族や親族と面会し連絡を取ることは、多くの国際的な条約の下で保障されている被拘束者の基本的権利です。ICRCは、被拘束者が家族との連絡を再開し維持できるよう尽力しています。何千もの被拘束者とその家族にとって、赤十字通信は定期的に連絡を取るための重要な手段です。これによって個人や家族の消息を確認し合うことができ、孤立感や先行きの不安を和らげることができるのです。

被拘束者と家族を結ぶ赤十字通信には、複数のICRC代表部と被拘束者の出身国の赤十字社・赤新月社の協力を必要とするため、大がかりな支援を伴います。赤十字通信は一通ずつ受取人に手渡されますが、その過程でさまざまな制約があるため、通信の収集と配達に時間がかかることもあります。

被拘束者とその家族が互いに連絡を取り合うもう一つの方法がビデオ電話システムです。被拘束者は、カメラを通じて繋がっている家族の顔を見ながら話すことができます。このシステムは、家族の面会の調整が難しい時期もあったアフガニスタンで特に効力を発揮し、多くの被拘束者が家族と連絡を取ることが出来ました。

ICRCは家族が被拘束者のもとを訪れることができるように調整・手配することもあります。特に、拘束場所が家から遠く離れていたり、高額な旅費が必要であったり、戦線や国境を越えなければならない場合に支援します。多くの場合、ICRCは収容所当局や関連する各国の赤十字社・赤新月社とも調整

**「家族の手書きのメッセージと、
子どもたちの描いた絵が入った赤十字通信を
初めて受け取ったときの気持ちを、
私は決して忘れません。
涙が溢れました。
家族からの手紙を手にししている状況を
本当に信じられませんでした」**

**6年近くグアンタナモ収容所に拘束された
アルジャジーラ・テレビのジャーナリスト、サミ・エルハジ**

しながら、被拘束者と家族が面会を実現できるよう支援しています。

こういった実例があります。亡くなった知人の葬儀に参列するためにアフガニスタン南東部に出かけたラル・パドシャーの兄はいつまでたっても戻ってきませんでした。4カ月後、ICRCからラル宛に赤十字通信が届きました。そこには兄の字で、自分が生きていて元気なこと、アフガニスタンのバグラム空軍基地に拘束されていることが書かれていました。「この通信を受け取ったとき、心からほっとしました。兄が無事であることを知って神に感謝しました」とラルは話します。ラルは返事を書き、以来2人はICRCを通して定期的に連絡が取れるようになりました。ラルはカブールのICRC代表部にあるビデオ電話を使って兄と話した後、「ほぼ2年ぶりに兄の姿を見ることができました。テレビ画面を通してだったけれど、感激しました」と語っています。

理解と尊重

人々をつなぐ さまざまな手段



一貫したアプローチ

離散家族への支援を成功させるには、関係者との密な連携が重要となります。多くの場合、関係者らの置かれた事情や、安全面に影響をおよぼすさまざまな要因を十分に理解し、さらに、離別や行方不明によって受けた身体的・心理的な深い傷について配慮することが不可欠です。

各国で一貫性のある効果的なサービスを可能な限り提供できるように、赤十字運動全体で統一された技術と手法を確立することが必要です。そのため、ICRCの中央安否追跡局が国際的なレベルで活動を調整し、各国の赤十字社・赤新月社に助言を行っています。

個人情報の保護

どのような状況においても、個人情報の利用には細心の注意を払います。情報収集は、関係者の同意を得てから行われます。個人の安全が第一であり、人々に危害を及ぼす恐れのある情報は決して使用・公表しません。

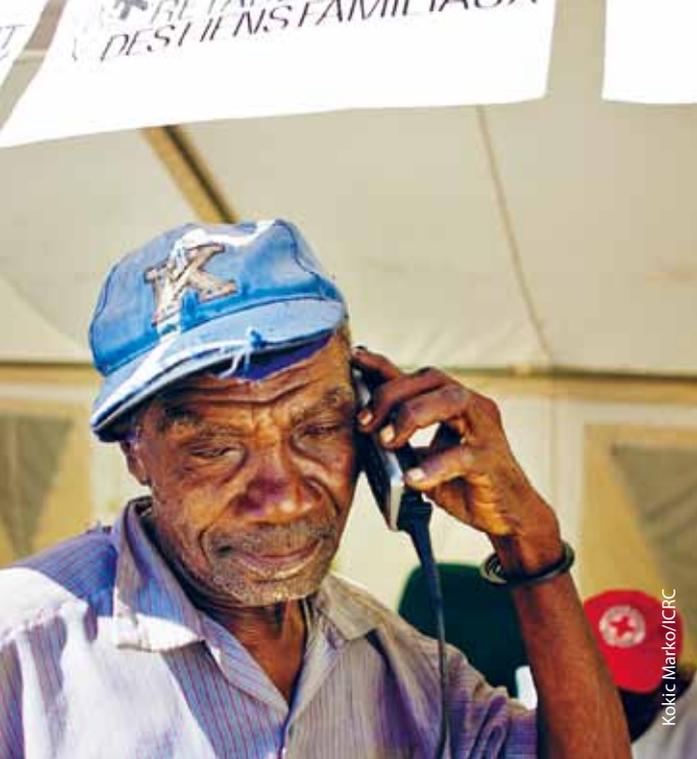
個人の詳細情報を扱う職員とボランティアは、国際法と各国の情報保護法の規則と原則に則って行動しています。個人情報を含むデータベースへのアクセスは制限されており、ファミリーリンク・ネットワーク内での秘密情報に関しては安全が保障されています。

離散した家族の状況はさまざまであるため、家族と連絡を回復するにはそれぞれの状況に最も適した手段やアプローチが重要です。

www.familylinks.icrc.org

ICRCは、ファミリーリンク・ウェブサイトを通して、離散した家族が連絡を取り合えるよう支援しています。このウェブサイトは、紛争や自然災害の影響で、家族が行方不明になってしまい消息を求めている人たちにとって、貴重な検索手段になっています。被害地域の外にいる人が、探している親族の名前をこのサイトに掲載すると、生存の確認が取れた人々の情報が徐々に集約されていきます。そしてこのサイトから、閲覧者は行方不明者の情報を共有したり入手したりすることができ、さらに行方不明とされている人自身が無事を伝えることもできます。

他の媒体と違い、ファミリーリンク・ウェブサイトは世界中に届き、データは常に更新されます。情報は公開されており、インターネットに接続できる人ならば世界中どこからでも、誰でも利用することができます。



家族をつなぐ電話

電話の活用は、家族間の連絡を再開し家族を安心させる上で、効果が最も直接的かつ迅速に現れる手段です。

パキスタンのカイバル・パクトゥンクワ州（旧北西国境州）では、2009年、何十万もの人々が故郷から逃れ、難民キャンプやホストコミュニティで暮らしていました。連絡を取り合うことは難しいため、いかなる情報も貴重なものでした。

家族と連絡を取り合いたいという切迫した要望を受け、パキスタン赤新月社とICRCは無料電話サービスを提供しました。その後避難民とその家族の間で、延べ6,000件以上の通話が実現しました。

モハマド・ラスールは、無料電話サービスを介して息子の声を聞いたとき、感動のあまりわっと泣き出してしまいました。息子は、1カ月以上前に身内8人と共に家を後にしましたが、ラスールは、息子、妻、そして身内が無事であることを知って心から安心し、ほとんどしゃべることができませんでした。電話を切ってから、小さな声でぞっと言いました。「彼らは生きています！」と。

追跡確認の依頼

追跡確認は行方不明者の家族から正式な依頼を受けて始まります。追跡依頼を受けると、情報の照合、居住地域や病院・遺体安置所の訪問、当局への問い合わせなどの調査が開始されます。収集された情報は家族に公開され、可能な場合は連絡再開のために活用されます。



2010年1月にハイチを襲った地震の後、地元ラジオ局が親族を探す方法として次のようなメッセージを定期的に放送しました。

「みなさん、赤十字国際委員会からのメッセージです。家族を探している方、家族にご自身の無事を伝えたい方、赤十字国際委員会がインターネット上に無料の安否確認サイトを開設しています。www.icrc.orgにアクセスし、家族の名前とみなさんの名前を登録してください。インターネットにアクセスできない場合は、ハイチ赤十字社の事務所を訪ねることもできます。住所は、1, angle rue Muguet et Route de Desprezです。自分が無事であることを伝えたいときにも、家族を探しているときにも、登録が必ず必要です。また、家族と自分の名前を正確に書いてください。登録者が増えれば増えるほど、探している方が見つかる可能性が高まります。」

ハイチ赤十字社の支援を受けて、赤十字国際委員会が呼びかけたメッセージです。

赤十字通信

赤十字通信は、大切な人と離ればなれになってしまった人々の間で、家族や個人の情報をやり取りできる短い手書きのメッセージです。

赤十字通信はマ・オンマーに安心を運んでくれました。2008年にミャンマーを襲ったサイクロンの影響で、村はほとんど破壊され、彼女は全てを失ってしまいました。家族は全員無事でしたが、ヤンゴンに暮らす姉と連絡が取れなくなりました。

マ・オンマーが家族と一緒にマウビの寺院まで辿り着くと、ミャンマー赤十字社の勧めで姉宛に赤十字通信を書きました。一方、姉は、3週間もマ・オンマーとの連絡が途絶えていたので、日に日に不安が募っていました。姉の代わりに赤十字通信を受け取ったマ・オンマーの姪は、「お母さん（マ・オンマーの姉）はとても喜ぶと思います。サイクロン自体も怖かったけど、おばさんがどうなったか判らないことが一番辛かったから」と話していました。





Kokic Marko/ICRC



Kokic Marko/ICRC



Kokic Marko/ICRC

